



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年も栢山の田んぼには水が入り、田植えが始まった。夜になると蛙の合唱もにぎやかだ。初夏のこの景色には、実に心身が癒される。風のつくりだす水田のきらめき、苗の育つ姿は、散歩の楽しみになる。今年の鮎は、大きさ・量とも出来がよく、待ち遠しかった釣り人には朗報だ。鮎の解禁前に行われる恒例の『クリーン酒匂川』に参加した。年々ゴミが少なくなっている実感は、利用者のモラル向上もだが、良く見かける火ばさみをもって散歩する人たちのおかげでもある。2期目を迎えた加藤市政とともに、小田原の6月は明るくスタートだ。

新九郎 6月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 5/30(水)~6/4(月) 小田原絵札展	西湘地区に縁のある、プロのイラストレーター達によるオリジナルのプレイングカード展
 6/6(水)~11(月) 鈴木文隆水彩画展	水辺の景色を求め、イタリアトスカーナ地方の光り輝く港町、日本のひなびた漁港や美しい風景のなかを流れる川を描いてまいりました。
 6/13(木)~18(日) 赤羽孝也作陶展	教員の時から、陶芸家として独立した20余年間の作品。食器からオブジェまでを幅広く展示します。
 6/22(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
 6/20(水)-7/2(月) 6/26(火)休館 横井山泰展 「子どもが騒がしいなら雨」	レセプション 6/23(土) 17:00~19:00 文化庁派遣給費留学生としてパリに1年滞在し、帰国後の作品を発表します。新九郎では2年ぶりの個展となります。

会期・展覧会名	会場
6/1(金)~4(月) 土里夢作陶展	アオキ画廊 0465-23-5624
6/14(木)~17(日) 虹のかけ橋展	アオキ画廊 0465-23-5624
5/30(木)~6/4(月) 第2回グリーンパレット展	飛鳥画廊 0465-24-2411
6/13(水)~18(月) 杉崎稔卒寿展	飛鳥画廊 0465-24-2411
6/20(水)~25(月) 一線美術会小田原グループ展	飛鳥画廊 0465-24-2411
6/6(水)~11(月) 水墨画 西山慶子展	お堀端画廊 0465-23-7819
6/17(日)~7/8(日) Art Now in 清閑亭	清閑亭 0465-22-2834
6/14(水)~24(日) 牧山俊雄写真展「佐渡の光陰」	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
6/2(土)~17(日)名まえのない 絵:きだまりの10人展	すどう美術館 0465-36-0740
6/2(土)~17(日) 海辺の寓話—加藤肇司	すどう美術館 0465-36-0740
6/12(火)~17(日) 大西志保展	丹沢美術館 0463-83-9550
6/1(金)~30(土)水・第4木休 柿沼朋実木版画展	ナラヤカフェギャラリー 0460-82-1259

小田原の街なみ再発見! 国府津・昭和レトロの街なみ 3

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤泰夫



1934年(昭和9年)丹那トンネルが完成すると御殿場線はローカル線となり、国府津駅の交通上の地位は低下したが、国道1号線(旧東海道)に沿ってできた街並みはそのままだった。造られた時代は違いが特徴的な建物が並ぶ。昔からある造りで1階と2階の瓦屋根が前へ突き出た建物。関東大震災後、火災から守るために前面をモルタルにした建物(看板建築)。そして、新しい四角い店舗住宅。今でもそのような建物が並ぶ街並みが楽しめる。

垂直のはずの建物や電柱の線だが、それらの線を斜めに描いてみた。街並みの雰囲気や動きに心引かれたからか。最後に散歩の親子を遠くに描き加えた。道端に腰掛けてのスケッチを終えるころには陽が傾いてきた。

垂直のはずの建物や電柱の線だが、それらの線を斜めに描いてみた。街並みの雰囲気や動きに心引かれたからか。最後に散歩の親子を遠くに描き加えた。道端に腰掛けてのスケッチを終えるころには陽が傾いてきた。

いよいよ「街なみ再発見!展」の作品募集がはじまります。

今年は原点に戻り、テーマを「小田原の建物・街なみ」とさせていただきます。エリアは少し限定されますが、魅力ある街なみが再発見!されることを楽しみにしています。奮ってご応募ください。



【応募票設置場所】

- ・銀座情報プラザ
- ・アオキ画廊
- ・飛鳥画廊
- ・ギャラリー新九郎
- ・ギャラリーコットン倶楽部
- ・ツノダ画廊

◆応募期間◆

平成24年6月21日(木)~7月3日(火)必着!

◆応募資格◆

年齢・職業(プロ・アマ)・お住まい等限定なし。

◆募集作品◆

絵画/6号まで、額装した形で

絵てがみ/A2サイズ以内(額装・パネル等展示できる形で)

写真/四つ切り~半折(額装・パネル等展示できる形で)

◆申込方法◆

応募票にご記入の上、事務局・各画廊にご応募ください。



アートフェスティバルの季節

風薫る5月は、各地でアートフェスティバルが開かれました。新緑の中ひとときアートめぐりを楽しみました。



伊豆高原アートフェスティバル

主催者谷川晃一さんの解説にひかれて来たのは、「岡野元勝絵画展」。八幡野港の朝一（城ヶ崎郷土資料館）を見た。自宅の前に広がる八幡野港を定点観測のように繰り返し描き続けた作家だ。左に半島、手前に港と船。海の沖の向こうには上る太陽、たなびく雲、ほとんど同じ構図の絵を30年飽きもせず描き続けた。独学だが油絵の技法がしっかりマスターされ、丁寧に描きこまれた画風はアンリ・ルソーを思わせる。同じ画題でも昇る朝日の色彩は毎日異なり、決して飽きることはなかったという。80数点の作品は、地元の人から集めたものなどという。期間中の来場者は1100人を超えたという。谷川晃一クレヨン画展。会場はレストランだ。昼食後で遠慮があったが「どうぞ」とシェフに気軽に案内され拝見できた。お隣も自宅を開放しての展示だ。現代アートとキルト作家のコラボを開催中。初対面にも関わらず気さくにいろんな話を伺うこの距離感が魅力だ。次は“ピストロくさむら”に向かう。マップを片手に案内通りに進んだつもりだが、迷路のようで見つからない。散歩をしているご婦人に尋ねると「近くだから」と、車に同乗してくれた。「地元の間人でも、間違えるから」といい案内くださる町の方からも、おもてなしの心が伝わる。田島征三「草の中のアート



虫たち」は、義娘で作家の田島麻衣さんが出迎えて説明してくれた。征三さんの水彩は、ハガキよりも小さい作品であるが存在感が素晴らしい。庭のあちこちには遊び心満点の流木アート。田島ワールドを楽しんだ。135号線お茶店の画廊で、梅原美喜子展 **bord and wire art** 人間模様ーを見る。タテ2mはある大きなシナベニヤを彫刻刀で掘った作品だ。ヒト形の様々な断片の廻りや、等高線のような線が囲み渦を作っている。線に囲まれた黒と赤のヒト形がリズムカルで楽しい。

昼すぎからの訪問であったが、林に囲まれた瀟洒な保養地の中をゆっくり見てまわることができたひと時は、実に豊かな時間だった。5月の新緑の時期に開催されるこだわりの納得だ。伊豆高原アートフェスは、「アート・まち・人」が作る自由さと非日常に浸れるのが魅力だ。リピーターが多い訳がよくわかった。



大磯芸術祭

第2回目になる芸術祭。版画家柿沼朋実さんが出品しているというので出かけた。会場は“海の見える森”。駐車場に斎藤史門さんのドームがあった。裏山の太木に作られたツリーハウスに登ると、相模湾が一望できるという。あいにくの雨で登ることはできなかったが、夢のあるツリーハウスだった。展示スペースは古民家を移築したという大きく重厚な建物だ。以前はレストランだったこともあるという建物は、この秋からは日本初のハウス型子どもホスピスになる予定だ。作品はチャリティでオークションの入札ができる。万華鏡・刺繍など作品も幅広く楽しめる。大磯の郵便局長さんの絵が目にとまった。値札を入れてきたが残念ながら落札の連絡は無かった。お子さんの絵の展示も素晴らしかった。個性を尊重した丁寧な指導が伺われる絵ばかりで楽しく描いている楽しめた姿が伝わってきた。展示環境の重厚さ、自然豊かな環境も雰囲気があり、良質の作品が楽しめたフェスだった。



「エピナール」という、今流行り始めているシェアハウスのような会場でデッサン展、フランス絵本展を見た。江戸時代のフランス絵本のセンス、デザインのシンプルさに驚いた。カフェでお茶をいただいたが、土日のみレンタルで借りての営業もできるらしい。調度品はイギリスのアンティーク。家具だけでも絵になるような魅力あるスポットは、今後も目が離せない。

5月のこと
*第65回市展 2019 を観覧した。小田原の文化振興における「市展」の持つ働きは、多くの市民が気軽に参加し楽しむ面と、高い水準を保ち続け後に続く人たちを牽引していく面とが求められていると思う。歴史ある「市展」は、「グループ展」とは一線を画す存在であってほしい。一般参加者の先頭に立ち、作品の力で次に続く人たちを牽引していく展示であってほしいと渾身の豊島シズ枝氏（招待）の作品からそう感じた。今回は藤尾栄氏（招待）の「雨ががり」が印象に残った。地平線の彼方から林を分けるように、一本の道路がまっすぐ手前に伸びて来る。坂を上がりきった眼前の道路はまだ濡れている。晴れ上がった空には雲が流れる。滑らかな筆致による、北海道の大きな自然が心地よかった。



丹沢アートフェスティバル

5月のさわやかな風に吹かれ、丹沢に出かけた。今年はこのフェスも、小田原のギャラリーも参加してエリアが広域になってきた。地図をたよりに、ひとときふたきを目指す。これでいいのかと心配になった時にたどりついた。「内山睦・高石光利展」展示は瓦屋根にひかれ四国に移った内山さんの織と、小屋をイメージしたインスタレーションは、高石さんの竹とのコラボレーションだ。川崎から移ってきたという高石さんは「ここにいていいと思うのは全く無音の世界になるときがあること」という。葉が落ちる音だけが聞こえる。奥様と二人、渋沢の里山でその暮らしを楽しむ。

渋沢駅北口、堀西本店のフランドールでは「牧嶋成仁展」を見る。店内を作品に見立て生かした展示が見事だ。本店では駐車場の壁もカラフルな色面でディスプレイされ、楽しい。レリーフ状の作品は雲。寄の自然の中から生まれた作品だ。ギャラリーゼンでは「斎藤史門・牧嶋成仁展」。斎藤氏は鉄が素材の彫刻だが、空間を囲むように配された作品は、むしろ軽やかさを感じる。東北の被災地から拾ってきた、オブジェを使った作品が印象に残った。牧嶋氏は水のゆらぎ、光をテーマに琳派風の作品を展示。氏の作品をまとめて見るのは初めてであるが、明るくPOPな作品だ。個性ある作品同士だが、調和のある2人展だ。菩提での4人展にも出品されていて、精力的に制作している作家のパワーが伝わる展示だった。



ソウセイカフェ 6/9.10.16.17



今年の2月、足柄上地域1市5町で、初のASHIGARAアートフェスティバルが開催された。元工場を手作りでアート&カフェに変身させたソウセイカフェは、開成町長も大変気に入られ、ぜひ存続してほしいとの要望があり、今回“あじさい祭り”の期間中に再開することになった。会場がわかりにくいこともあり、今回は遠方からもわかるように、工場の屋根に巨大な絵が描かれた。カフェのテーブルも新たに作られ、工場わきの道もぬかるみ対策と自然を生かした木くずで補修された。アジサイ祭りの期間中4日間だけの開催ではあるが、今回も、参加者がおもてなしの心で準備を進め、建物と場がアート作品として進化・変身している。あとは、土手の草をきれいに刈り取るだけだ。作品は主に地域の作家が出品している。開成町最大のイベント“あじさい祭り”のついでに、手作りカフェ&アートに立ち寄りお楽しみいただければ幸いだ。アートでの地域活性化を図ろうと、いろんな試みがされているフェスだが、大事なことは参加者がまず楽しみ、地域の方を巻き込んで共に楽しむことに尽きる。今秋、前回のVOL.0を受け「ASHIGARAアートフェスティバルVol.1」が予定されている。

5月のこと
*第65回市展 2019 を観覧した。小田原の文化振興における「市展」の持つ働きは、多くの市民が気軽に参加し楽しむ面と、高い水準を保ち続け後に続く人たちを牽引していく面とが求められていると思う。歴史ある「市展」は、「グループ展」とは一線を画す存在であってほしい。一般参加者の先頭に立ち、作品の力で次に続く人たちを牽引していく展示であってほしいと渾身の豊島シズ枝氏（招待）の作品からそう感じた。今回は藤尾栄氏（招待）の「雨ががり」が印象に残った。地平線の彼方から林を分けるように、一本の道路がまっすぐ手前に伸びて来る。坂を上がりきった眼前の道路はまだ濡れている。晴れ上がった空には雲が流れる。滑らかな筆致による、北海道の大きな自然が心地よかった。